やすらぎ

「歎異抄」（第二十回）

櫟暁講述

「歎異抄」　第十一章

一文不通のともがらの念仏もうすにおうて、「なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」と、いいおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいいひらかずして、ひとのこころをまどわすこと、この条、かえすがえすもこころをとどめて、おもいわくべきことなり。誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからのはからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して、実報土に往生するなり。（続く）

（真宗聖典六三十頁）

まず弥陀の誓願にたすけられるという、「まず」ということが大事である。それは、私の信心が決定するということで、人生の最優先課題である。信心が決定しないということは、その人の生き方がはっきりしないということであるから、ただいたずらに生活条件を都合よくするということだけで生きていることである。

ただ生きているということ自体、その意味がはっきりしないで、条件よく生きるということだけであるならば必ず絶望する。

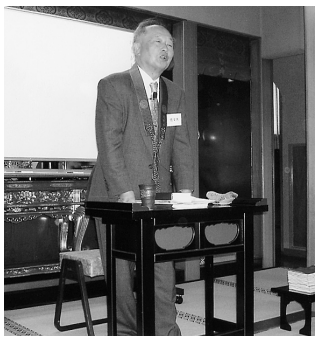
阿弥陀如来の誓願の不思議によらなければ、我々は迷いから離れられないということを深く信じる。如来の誓願不思議によらなければたすからない、生死をいずることはできないということを信ずるのである。

念仏申すということはただ発音すればいいということではない。如来の誓願不思議によらなければたすからない我が身であるということを深く信ずるがゆえに念仏申す。念仏申すということは、色々なご縁で申しますが、称えることにおいていつもそのことを確認させられていくわけである。

念仏申すということは我々をもらさずおさめとるという如来の大慈悲によって、我々は生死を超えられる。すべての人をもらさず救うという誓願によって荘厳された浄土を永遠の本国として生きられるものにさせていただくということである。

（当寺ご法話抜粋要約、文責副住職　釈徹照）次回へ続く

光照寺寺報
発行所
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人
池田孝郎



総会　佐々木先生法話

婦人による仏教讃歌

真宗本廟上山参拝感想
護持会総会報告
盂蘭盆会法要

八月五日(日)一時三十分　厳修

詳細は三頁
詳細は五頁
詳細は七頁

無碍光（むげこう）

―凡夫が仏になる法―

住職　池田　孝郎

今回は二十一世紀の現代を直視して、その問題として「欲望」をテーマにして考えてみたい。

近代の科学的発展とその思考の源を尋ぬれば、「デカルト」に達することを思う。有名な言葉として、「私は考える、ゆえに私は存在する」である。ここに主語が逆転してしまった。ここから近代がはじまり現代に至っているといっても過言ではない。「アリストテレス」は、「大いなるものは、必ず主語になって述語にならない」と云い、本来洋の東西共通した認識であった。

「我（われ）」という人間が主語になって全てのものを考えるのが当然となって今日に至って、「大いなるもの」の主語を忘却してしまったのが今日の我々の姿です。

ゆえに、「万物の霊長」として人間を全ての生物の頂点に位置付け、「大いなるもの」に取って替わってしまった。その傲慢のつけが環境を破壊し、核の恐怖におのののき、なお人間の能力を開発し、克服せんとして煽（あおり）る。それに適応しないものは、社会の階梯（かいてい）から脱落し、自他の烙印は「不幸」と押される。

この「幸」、「不幸」の烙印も心理学的には、「アブラハム・マズロー」の「自己実現理論」として用意されている。

私も若い時はこの「マズロー」の「自己実現」に向かって、「真・善・美」を追い求めた一人であった。

しかし、私は挫折の中に呻吟（しんぎん）した。それは何んであったのかと云えば、「私が、私が、・・・。」の私が全ての主語となった追求であったからです。

この私の転換が失意の中に起きたのです。それは「大いなるものに生かされてある私」と気付いたのです。これこそ「他力」であったのです。「生かされてある私」に気付かず、「自分が、自分が。俺が、俺が」と自己中心的我をよしとして、追い求めていた「真・善・美」であったのです。

他力として回向されて見る「真・善・美」こそ、如来浄土であったのです。この「真・善・美」こそ、広大無辺の広がりと、深さをもった浄土でありました。

ここに主語の転換が私に起きたのです。喩えて云えば、蹠（もが）いていたのです。大いなるものの用（はたら）きに身をまかせれば、ポッカリと浮く身であったのです。自らに浮力があったのです。そこから仰ぎみる世界は輝く広大な世界であったのです。

「自力」、「他力」の言葉がありますが、「大いなるものの用（はたら）きに乗托（じょうたく）する」表現こそが「他力」を示していたのです。手足を動かせば動くではありませんか。丁度水泳と同じ喩えです。

時代の流れは変えることはできません。ただ流されてゆくのか、それとも、流れてゆくのかの違いがあると思います。流れてゆくに「意志決定」があり、「真の自己」は見失うことはありません。

仏法では「欲界・色界・無色界の三界を超える」と示される。それこそ、このマズローの自己実現の転換に欲生心（よくしょうしん）があることです。

小さな窓から

入院中の嫌な思いに出会った事を話したら病中の妄想だと相手にされない。天井に終日水滴の音が響く、頼んでも見に来ない。「あのくらいの音ならすぐ慣れるよ」4か月たっても慣れない。四面楚歌である。娘はよくテレビを見ながら「わァーホームラン」と奇声を発する。一度鬱療法に真似てみたい。夢を見た、私の生涯に出逢った人達全員集ってお祭りをしている。花車の采配を振っている西岡さんが私に声をかける。「この世は嬉しいね、このまんまで私の世界なのだから、皆死んでも誰もいなくならない、そのまんまなんだから嬉しいね」踊りながら行過ぎる。翌朝水漏れの検査に来ると電話があった、続いて同い年の叔母の死の報が入る。夢は私に何を知らせようとするのか。ホームランはまだ叫ばない。

渋谷　恵美子

鈴の音

わかったと思った時、
見えなくなってしまうことが
いっぱいあるってことを、
人間は知ったほうがいい

小泉吉宏（『同朋新聞』）

「候補衆徒記念　上山参拝記」

佐々木　玄吾

阿弥陀堂前にて

光照寺副住職　池田孝三郎師は本年三月、住職の推薦を得、本人が誓約し、総代三名、及び埼玉組長の同意を得て、候補衆徒（住職後継者）承認申請書を宗務総長宛に提出し、承認されました。

光照寺の護持会員　四百三十七名にとって後継者の誕生ほど嬉しいものはありません。そのお礼として、門徒役員を中心とした光照寺奉仕団を結成して、一泊二日の日程で、真宗本廟同朋会館に宿泊し全国各地の門徒・同朋の皆さんと共に生活し共に親鸞聖人のみ教えをお聞きしました。

参加者は引率責任者　池田孝三郎師他九名、計十名でした。

第一日目（五月二十九日）

午前十一時二十分より講堂で結成式があり、昼食後写真撮影、そして御影堂修復現場を見学しました。聖人の御徳の広大なることに感銘致しました。

部屋に帰ってオリエンテーション、私共の担当の補導は、若いが落着いた見義智証師、これから二日間、私共と行動を共にして御指導頂きました。

夕事勤行、夕食、休憩の後、本山教育部長、武井弥弘師に講義を頂きました。

お寺について

親鸞聖人によれば、お寺とは「ならういえ」であります。何を習うのか。自己を習う。私共は自分のことはわかっているつもりでいますが、そこが落し穴で、仏智によらなければわからないのです。聞法し、勤行し、生活し、座談をし、それらを続けていく中で、自分のことがだんだんとわかってきます。そのわかってきた所に報恩感謝の生活が開けてくるのです。だからお寺で営まれる報恩講は、真宗門徒にとって、最も大切な行事といえるのです。

講義の後に座談会がありました。座談会では、講義に感銘を受けたお礼、光照寺の課題等が話されました。座談会も講義も二日間においてなされました。

武井先生の講義

それをまとめてみると、光照寺にも色々と課題はあります。その課題に対処する道も色々ですが、私共においては課題を背負って光照寺にお参りする道を歩みたいとなりました。

第二日目（五月三十日）

晨朝参拝、朝食後　阿弥陀堂の清掃奉仕。前面の廊下を一人々々水拭きして仏前を荘厳しました。終って、講義、座談、解団式、昼食後、わが奉仕団も解散しました。

結成式

候補衆徒記念　本山上山参拝記
「いよいよ求道の出発点として」

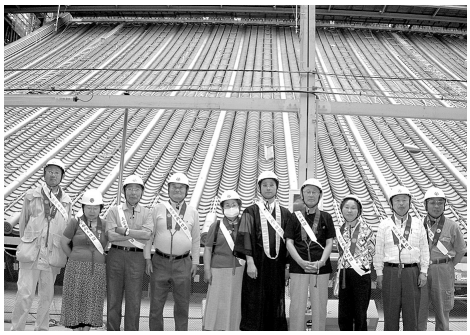
副住職　池田孝三郎

不肖にも私が光照寺の法務に携わり副住職として十一年を過ぎ、期せずして候補衆徒（住職候補）として研鑽を深めるようなご縁を頂きました。

つきましては、これまでお育て頂いた諸仏、法友、ご門徒さんのお陰であることをしっかりと受け止めて精進して参りたいと、感謝の気持ちを込めてまずもって申し上げます。

又、このご縁を機に佐々木玄吾先生より、本山へ上山しようとのご発声により、山田会長（諸準備のご尽力に感謝します）をはじめとする、私を含め、役員の方々十名と本山へ上山して参りました。

本山では、教育部部長の武井弥弘先生が教導を勤めて下さり、見義智証補導さんの大変なご配慮、又、同朋会館の職員の皆様によって、とても実りある、且つ、意義深い二日間を過ごすことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。



新瓦の前にて

御影堂門の内部にて

武井先生は佐々木先生と当寺住職とは古いご縁があり、とても親しみを感じながら講義を頂戴することができました。お忙しい中、時間を作って頂いたのは、佐々木先生のご配慮、又、武井先生の熱意の賜物と感謝致しております。

武井先生の講義は目が啓かれる内容でした。テーマとしては「寺とは何か」、「寺を荷なうとはどういうことか」、「活性化した寺」ということが大きな課題として講義を頂戴したことでした。

内容は深くまとめきれず、これからの歩みの核としていきたいと思いますが、さわりだけ申させて頂きますと、「死が見えない現代にあって、お寺とは死（老・病も含む）という問題から目を離さないこと。親鸞においては寺は道場という、仏の教えに私自身を聞かせてもらうことであり、自己をならう家という領解がある。仏智によって老・病・死という、逃げれないものに出遇うことによって超える」等、伝えきれませんが、私自身、教えと真向かいながら、現実生活を生き切るパワーをもらったことでした。

私がここで申すことはこれまで出遇った方々並びに、冥衆のご加護に感謝して、開基住職の大願を微力ながら受け止めて、「念仏の一道、彼岸に通ず」という気持ちで聞法に勤しんで参りたいと思います。益々のご教導とご協力を念じます。

南無阿弥陀仏。

京都、東寺にて

「光照寺護持会報告」

山田　恒

平成十八年度第八回光照寺護持会総会が五月二十七日十時から光照寺本堂において、左記の式次第で行なわれました。当日の参加者は会員四百三十七名中四十一名でした。

式次第

一、勤行
二、佛教讃歌
三、法話「凡夫の求道」
　広島県豊平道場主佐々木玄吾師
四、　総会
（一）会長挨拶
（二）議長選出
（三）護持会の活動実績について
（四）護持会の収支決算について
（五）会計監査報告
（六）今年度の活動計画について
（七）今年度の収支予算について
（八）聞法会の紹介

法話は「凡夫の求道」と題して、蓮如上人御一代記聞書第五十八条「たれのともがらも、われはわろきとおもうもの、ひとりとしても、あるべからず。これ、しかしながら、聖人の御罰をこうぶりたるすがたなり。これによりて、一人ずつも心中をひるがえさずは、ながき世、泥梨に深くしずむべきものなり。これというも、なにごとぞなれば、真実に佛法のそこをしらざるゆえなり」を題材にされたお話を戴きました。全ての人は我は善きと思っており、どの様な人であっても誰一人としてわれ悪ろきとは思っていない。しかしこれは親鸞聖人からお叱りを受けた人のまことの姿である。一人づつでよいから、自分こそ正しいと思う心をひるがえさなければならない。さもなければ長き間、地獄に沈まねばならない。どうしてこのようになるかは、真の佛法の奥底を知らないからである。終始一貫・積極的聞法により如来の真心に出会って、真の凡夫として誕生しなければならない。

総会に入り、前年度の護持会活動の実績及び収支決算と監査結果が報告され承認され、続いて今年度の活動計画案と収支予算案が提案され何れも原案通り可決承認されました。

今年度の活動方針の中に護持会の主要目的である、会員相互の親睦について次の二点が強調されております。

①親睦旅行は多数の会員に参加頂けるよう、今年は従来の宿泊を止めてバスの日帰り旅行としたこと。

十月二十日（土）
ぶどうの郷　甲州方面

ご家族を含めた多数の参加をお待ちしてます。詳細は後日ご案内します。

②絵解と声明のサークルを立ち上げること。絵解については別稿を参照下さい。声明は正信偈・浄土三部経・和讃・御文などを特別に勉強しております副住職から学ぶ会です。後日呼びかけ文を配布しますが、皆様の力なくしては出来ないことですので、是非多数の方のご参加を希望します。いずれも二ヶ月に一回程度の開催を考えております。

また、今年度に入り五月に太田廣彦氏が講習を受講され、新しく推進員になられたとの紹介がありました。光照寺では十四人目に当たりますが埼玉組内の寺では一番多い人数と思われます。

続いて聞法会について副住職から内容紹介と参加の呼びかけを行ないました。

総会終了後、お斎を頂きながら始めて参加された方の自己紹介と三人の方の感話がありました。

引き続き、三輪副会長の語りによる絵解サークルのデモを行ないました。今回は親鸞聖人のご一生を伝える親鸞聖人御絵伝の前半部分のご伝絵を、パソコンに取り込みその映像をプロジェクターからスクリーンに映して行ないました。絵解は初めての方が殆どのようでしたが、聖人の出家のご様子などに見入っておられました。続きは次の機会に行なう予定です。

以上の通り本年度の方針を決定して定刻に終了しました。皆様方のご支援、ご協力方お願い致します。

護持会総会

「絵解の発表をして」

三輪　民子

昨年の護持会役員会で絵解の話が出まして、我々の力でどこまでできるか解りませんが、とにかく挑戦してみようとの話になりました。そして、護持会総会に発表紹

介出来るように仕上げて、興味のある方達とサークル活動を進められるよう、山田護持会長、副住職、三輪の三人で、お借りした資料をもとに始まりました。まず絵解についての説明から。

絵解とは、絵巻物や掛け軸になった絵伝などの絵を、教義と結びつけて解釈するもので、一木一草（はたら）に至るまで、仏法のどの様な用きを表現しているのか、描かれた人物のどの様な思いを表現するためのものか、それを解釈して同行に伝えるものです。絵解の発祥は中国の古い時代と伝えられております。

真宗では、宗祖親鸞聖人の三十三回忌（一二九四年）の折、曾孫の覚如上人が親鸞聖人の教法宣布の徳を讃える報恩講を創設されましたが、翌年に聖人の縁起でもあります善信聖人（親鸞聖人のもう一つの法名）絵が最初の御絵伝と言われております。

絵解の様子（写真は三輪さん）

しかし、各地の真宗末寺に御絵伝が下附されたのは、それから三、四百年を経た元禄時代以降になります。しかも当時は統一された絵の説明文が無かった為それぞれ独自の説明がなされていたようです。その後、安永二年（一七七三年）に御絵伝教授抄という書物が発行され、今の絵解が確立しました。

この絵解きによる法話は文化・文政の十九世紀始めから盛んになり、近世後期から幕末にかけて真宗布教の大きな流れになりました。しかし、その頃盛んだった節談（フシダン）説法とも相俟って、その過度の娯楽性に危惧を抱いた東西本願寺が、明治政府の宗教政策を配慮して明治十年と十三年に、それぞれ絵解禁止令をだしたことにより衰退してしまいました。この様に御絵伝と御伝鈔の伝達方法としてこの絵解は、一時期の真宗発展の大きな推進力となりました。最近では、関連の書籍なども発行され、たまにですがお目にかかる機会が出てまいりました。三人で最初はどんな形で発表するのか、時間をどの位にして、どの程度の紹介にすればいいか、絵解について解って頂けるよう、どんな風にしたいのか、見て聞いて、楽しんでもらえるようにするにはどうするのがいいのか、具体的に実態にそって行う絵はどこでどんなものを用意出来るか、それをどのように発表すれば皆さんに解って頂けるか悩みました。ともかく真宗会館所蔵の二幅ものの御絵伝をデジカメで撮影させて頂くことが出来ましたのでそれをパソコンで編集した画面で進めることになりました。※画面に合わせた原稿を作り、練習が始まりました。（※今回は親鸞聖人のご一生を伝える「本願寺・親鸞聖人伝絵」の前半をお話することとしました。）

元来絵解は、説明の文章を暗記して、絵をさしながら説明するものようですが暗記はとてもできそうにありませんので、文章を読むことに専念する人と、絵の案内をする人を決め画面の映写は副住職と、各々の役割分担をしました。各人で工夫をし、コミュニティセンターで場所と器材（パネル等）を借り半日練習をしてパソコンの編集をして仕上げることが出来、総会前日にリハーサルをし、ようやく仕上がりました。

当日、プロジェクターの不調で皆様に御迷惑をお掛けしましたのに気持ち良く、静かに鑑賞して頂き、大変感激致しました。何のお礼も申し上げずに終ってしまい申し訳ありませんでした。皆様の御協力で無事に御紹介することが出来、ありがとうございました。お解り頂けましたでしょうか。どなたか、共感して頂けましたら、御一緒に絵解の続きを始めませんか、二ヶ月に一度位の活動で進めて行きたいと思いますのでよろしくお願い致します。（副住職、山田、三輪）　以上。

推進員後期教習を終えて

太田　廣彦

五月八日～十日の三日間、京都本山において、後期教習を受講致しました。東京教区は十名とスタッフ四名計十四名の構成でした。

本山竹下教導のもとカリキュラムに従い、前期教習から一貫した中で、真宗の基礎を学ぶことでした。

教習は三回の講義と座談会、阿弥陀堂と講堂での晨朝参拝夕事勤行、帰敬式参列、清掃奉仕と諸殿拝観、交代で勤める食事当番等も印象深く、忙しい体験の三日間でした。

東京教区は多数が前・後期連続受講者でもあって、終始なごやかな気分で受講できたことは大変有難く思っています。

終盤は宣誓文作成に多少時間も要しましたが、互いに活発な意見を出し合い、各自の真宗門徒としての心構えが感じられる宣誓文がまとまりました。その夜教導さんも入り私達は夜の更けるまで語り合いました。

翌朝阿弥陀堂での宣誓式に私達全員は力強く宣誓文を唱和致しました。

私自身、推進員としての新たな機縁により、愈々仏法聴聞・念仏の教えを依り所とした生活を、一層心掛けたいと思う次第です。

合掌

お盆

先日、夜の暗がりに駐車場の明かりを求めてノコノコ歩いている小さいクワガタを見つけた。その瞬間、幼少の頃にクワガタ採りによく行ったことを思い出した。二十年も前のことが一瞬で昨日の出来事のようにフィードバックしてくる。何とも不思議な感覚です。なつかしさを感じると同時に森林がだんだんとなくなっていくこの土地にクワガタは必死に生きているんだろうなと勝手に思いながら感慨にふけりつつ夏の訪れを実感しました。

夏といえばお盆、お盆といえば、盆踊りや花火。楽しい想い出がなつかしさを誘う。なつかしいという感覚はどこからくるのか。

楽しいことだけではなく、辛い体験も自分を成長させてくれたことで、今においてはなつかしさを感じさせることでしょう。

過去の足跡をなぞると今の自分が確かなものとなってくるようにも思えます。消しゴムで消せるものなら消したい過去もありますが、消してしまったら今の自分は成り立たないです。

それは、先祖の誰か一人が欠けたら今の自分がここに存在しないし、今生に出会った人達の一人でも欠けたら「今」というものは成り立たないということにもつながります。

なつかしいという感覚は今の自分を形成していることを確認させてもらえる響きなのではないかと思います。

お盆の法要でそのなつかしさを体験し、また一年毎に味わっていけたらと思います。

ご家族、縁者お誘い合わせの上、お盆の法要にご参加下さいませ。

（副住職　釈　徹照）

盂蘭盆会法要

- 8月5日（日）1時受付
- 午後1時30分～3時30分まで
- 光照寺本堂にて
- 勤行・法話

※準備の都合上、出席人数をご連絡下さい。
預骨、初盆の方は率先してお参り下さい。
また、どなたでもお参りできます。
真宗のお盆に触れて下さい。ご参詣をお待ちしてます。

お盆参り

- 7月13日から16日の期間
- 8月4日から16日の期間
  （但し5日は除く）

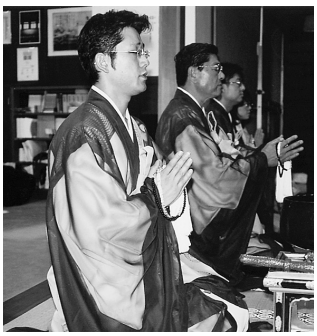
※ご希望の日にちをお知らせ下さい。
時間につきましては、こちらで調整させて頂きます。
ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

ひとくち　歎異抄

羅漢：師弟の姿はいかに。
「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう」
第２章

親鸞は法然聖人にだまされて念仏して地獄に落ちても後悔しない。
川越喜多院の五百羅漢

絵解に見入る皆様



勤行の様子

お知らせ

―寺務所より―

◆法要のご案内

●盂蘭盆会法要
八月五日(日)、午後一時三十分より厳修。詳細は七頁参照。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
七月四日(水)午後一時半～四時半まで。講師は櫟暁先生。和讃を学んでいます。八月は休み。

●大経の会
七月二十二日(日)、八月は休み。九月十七日(月)、十月二十日(土)へ変更、移動聞法会(日帰り旅行合流)、十一月十一日(日)、午前十時～午後三時まで。細川巌著正信偈讃仰(三)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会
七月五日(木)は七月十一日(水)に変更となります。ご注意下さい。八月は休み。九月六日(木)、十月四日(木)、午後二時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●さいたま親鸞講座
八月十八日(土)、十月六日(土)、午後二時～四時まで。講師は四衢亮先生(岐阜県不遠寺住職)会場、仲町川鍋ビル八階会議室(さいたま市大宮区仲町二-六〇)会費一回千円。市民公開講座です。

●(仮称)絵解サークル
ご関心のある方はお寺までご連絡下さい。

●(仮称)聲明サークル
九月頃に開催予定。詳細は別途ご案内致します。

●光照寺旅行
十月二十日(土)日帰り旅行(甲州山梨県)を企画中、別途ご案内致します。ご予定下さい。

●お願い
ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しくお願いします。

俳句・川柳

授業中の学生の背緑燃ゆ
青春に鍵してべにばな栃の花
ひばり落つややあつてパラグライダー
吉沢　光昭

猫越岳(ねこだけ)のあせびに咲きし雪の花
「ようこそ」と言えぬ便りの黄砂かな
西木　順子

五月晴歩行者天国溢れけり
鯉幟思い出綴る風のあり
浅間山雪形つくる巨象かな
一本の芍薬背に負う遺影かな
柿若葉青天はるか飛行雲
車椅子つつじ歩道の母娘かな
布施　毅夫

月ありて閉ぢたる牡丹夜も匂う
道端の佛に木の芽花のごと
垣越しに隣の灯影夏近し
花岡　要

見聞(ミキ)きする縁は異なもの仏(ブツ)の縁
厳しさは仏縁なれど世間並み
幸せは南無阿弥陀仏念じます
釈　義深

短歌

糸魚川(いとい)の翡翠(ひすい)の指輪(ゆびわ)買いくれし亡き夫思う三回忌となり
田中　徳子

この世にて寂しきものはと問うてみる通じあわない心と心
護られて生かされていると感じつつひれ伏すことのできぬ悲しさ
赤秀　品枝

清流の水路の上に散る花は君が夢のせし花筏なる
桜花咲きつくしてやあわれなり風の悲鳴にきりなく散りぬ
霊園に春のひかりのそそぎきて長寿米と二周年祝う
全山がまばゆいばかり若葉して碓氷峠を一気に越ゆる
自噴する湯花に浸り癒される「鵜の浜」の宿は妹が里
原潜が北極海で事故という新幹線内でテロップ流る
拳ほどのオレンジの産地はイスラエル輪切ればかすか硝煙の匂い
布施　毅夫

母好(この)む本を借りくる子のありし友の笑顔にこころなごみし
ありがたや杖(つえ)を持たずに街歩く今はなつかし落ちこんだ日々
ゴメンナサイ頼みごとではおお急ぎ後(あと)の報告のんびりゆるり
親孝行二種類あると恩師言い物の孝行と精神の孝
駅近しハタと気付いたバスの中入れ歯忘れた気も萎え〳〵だ
篠原　潤子

梵鐘

花岡　要　画

国際交流でフランス人と仕事をした。半年間で五十通程のメールを交換したが、個人的な話は一度もしなかった。お互いが分からないまま出会いともに短い生活をした。

帰国の前夜、話題が家族のことになった。そして、始めて個人的なことが話せない理由が分かった。アフリカに旅行中、最後の訪問地で悲劇が起き、愛する人を失い自らも傷付いた事実があったのだ。似たようなお互いの過去に共感しあい、悲しみは心の一番奥にしまっておこうと手を取り合って涙した。本当はそんなことで癒えないことを知っているのにそれ以上の言葉が見当たらなかった。ただ、ほんの一瞬、しまい込んだ心を見せ合い共感したことで、文化や民族を超えた人間としての生き方を確認しあえた。

宗教は文化の根底をなしている。宗教なくしてお互いのアイデンティティは語れないと。

（釈尼雅亮）